

# 北海道 150 年道民検討会議 第 3 回北海道みらいワーキング 議事録

日時：平成 28 年 9 月 1 日（木）15:00～16:50

場所：第 2 水産ビル 4 階 4 F 会議室

## 【出席者】

### < 委 員 >

小磯委員【座長】、大津委員、河崎委員、津山委員、林委員、山崎委員、吉田委員、太田氏（折茂委員代理）、平野北海道総合政策部次長兼政策局長（山谷委員代理）

計 9 名

### < 事務局 >

（北海道経済連合会）水野総括部長、山崎次長

（北海道）平野総合政策部次長兼政策局長、岩崎北海道 150 年事業準備室長、青山主幹、武藤主査

## ● 青山主幹（事務局：北海道）

それでは、時間になりましたので、「第 3 回北海道みらいワーキング」を始めさせていただきます。本日はお忙しいところ、また交通機関が非常に乱れている中、お集まりいただき感謝を申し上げます。事務局の青山でございます。改めてよろしくお願いいたします。

はじめに、本来であれば、山谷委員、北海道副知事から事務局を代表してご挨拶を申し上げるところですが、本日、災害対応業務でどうしても外せないため、欠席とさせていただきます。

本日は、総合政策部次長兼政策局長の平野が代理で出席をさせていただきます。ご挨拶を申し上げたいと思います。

## ● 平野総合政策部次長兼政策局長（北海道）※山谷委員代理

本日は、大変お忙しいところ、また、災害で交通も不便な中、お集まりいただきまして感謝を申し上げます。

今、青山からもお話をいただいたとおり、山谷副知事でございますけれども、災害対応のため欠席しておりますので、代わって私の方からご挨拶を申し上げます。

6 月に第 1 回みらいワーキングを開催してから今回で 3 回目となります。お陰様で、皆様方からの素晴らしいアイデアに基づきまして、大変よい基本方針ができあがりつつあります。道民検討会議の委員の皆様方からも、高い評価を頂戴しているところでございます。

予定しておりました会議につきましては本日が最終回でありまして、委員の皆様が一同に介してご議論いただくことも今日が最後となります。本日も、これまで同様に忌憚のないご意見をいただきたいと思っておりますし、また、具体的な事業につきまして、大小に関わらず、柔軟なアイデアをどんどん出していきたいと考えております。

また、北海道 150 年の記念事業につきましては、より多くの道民の皆様方に知っていただき、多くの方々方が事業に参画するような気運を盛り上げていくということが大切でございますので、本日は、これからの広報のあり方についても、是非ご提案などいただければと考えております。

また、山谷副知事も前回の会議で申し上げておりましたが、それぞれの分野でご活躍されている皆様方におかれましては、基本方針が策定されまして実行委員会が立ち上がった後も、引き続き、北海道 150

年事業にご関心を持って頂きまして、それぞれのお立場で、ご支援・ご協力をいただきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

最後に、小磯座長におかれましては、大変お忙しい中、3回のワーキングに加えまして、道民検討会議への橋渡し役も行っていただきまして、この場を借りてお礼を申し上げます。本日、最後のワーキングとなりますが、引き続き、議事進行、取りまとめについて、よろしくお願ひいたします。

### ● 青山主幹（事務局：北海道）

それでは、議事に入る前に、本日の出席状況を確認させていただきます。

まず、曾田委員は都合により欠席となっております。

それから、折茂委員につきましては、北海道バスケットボールクラブの太田様が代理で出席をいただいております。先ほど申し上げましたとおり、山谷委員につきましては、平野政策局長が代理で出席をしております。

それでは、以降の進行については、小磯座長にお任せいたします。よろしくお願ひいたします。

### ● 小磯座長（北海道大学公共政策大学院）

皆さん、こんにちは。

早いもので、このワーキングも3回目ということになりまして、私自身は、先ほど平野さんからご説明がありましたとおり、検討会議の方のメンバーで、なおかつこのワーキングの座長ということで、繋ぎ役というのが私の役割です。

前回、8月8日に第2回の検討会議がありまして、まず皆様方に改めてお礼を申し上げたいのは、「北海道みらい日誌」を皆様方のご尽力で審査していただきまして、3人の高校生の作品を検討委員会の中でご紹介させていただき表彰を行いました。この作品の中身、質は、検討会議の皆さんに大変なインパクトを与えました。1人は欠席だったのですけれども、中川さん、坪井さんというお二人の高校生が出席して、自分自身で作文を読み上げ、なおかつ感想を述べました。前回の委員会は、それが最大のイベントといいますか、特に富良野の坪井さんという高校生は、自分の作文を全部暗記して、自分の思いを語るという、なかなか感動的なストーリーがありました。ということで、みらい日誌の成果については、そういう形で検討会議の皆さんにもしっかりと我々の審査の結果、思いも含めて伝わったのではないかなということで、最初にご報告しておきたいと思ひます。

それから、後でご議論いただく基本方針、これにつきましても前回の検討会議で「原案」ということでご報告がありました。事務局のご報告の中では、特にワーキングでの議論経過というのがなかったものですから、個人的な検討会議のメンバーとしての意見を申し上げようかと思ひたのですが、ワーキングで皆さん方が議論されたこの経過を検討会議で報告しておかなければということで、急遽、私の方から、6月20日、7月20日に皆さん方と一緒に議論を重ねてきた私なりの集約ということで、少し勝手な思いなのかもしれませんが、検討会議の皆さんにお伝えしてきました。

お伝えした趣旨というのは、ひとつは、150年事業を単にイベント、それだけに終わることなく、我々の先人への敬意を持って150年の先人の歩みをしっかりと将来に伝えていく取組にさせていただきたいという、そういう思いがワーキングの皆様方からも感じられたということでご紹介させていただきました。

もう1点はですね、やはり足元の北海道という我々の地域、しかも北海道は大変広い、いろいろな地域がある。その地域を見つめ直す、理解を深めていく、そういうきっかけにしていきたい、そんな思いが皆様方の声としてあったということをご紹介させていただきました。「北海道みらい日誌」、私も読ませて

いただいたのですけれども、あの若者の思いというのは、実はそういうことで、この機会に自分達の北海道を見直す、そういう機会の中で、ああいうメッセージが生まれてきたのかなど。

それから、最後にですね、津山さんを紹介したのですね。実は150年事業を実践しておられるメンバーがワーキングにいます。これは私なりの思いで、検討会議の場もそうなのですが、誰かがやってくれる、それに対してこうやればいいじゃないか、というだけでは、この150年事業は、私は限界があるような気がします。それぞれの立場で何が出来るか、それを考えて実践していくこと。これが積み上がることによって、この150年事業は意義があるものになる。そういう中で、我々のワーキングの中で既に実践しておられる方がいるということでご紹介をさせていただきました。

これは、私なりの検討会議の皆さんへのメッセージなのです。あれだけの検討委員会のメンバーですから、皆さんがその気になって本気で取り組めばすごい事業になる。ただ、なかなかそういう気運、そういう状況を作り出していくのは難しい。検討委員会の中では、やはりこれだけの事業をやっているが、なかなか発信されていない、気運がなかなか高まっていない。そういう中で、どういう形で伝えていけばいいのか、それはPRであり広告であり、いろいろな形の情報発信であり、そんなところが大事じゃないかなというのが、前回、検討会議の多くの皆さんからご意見として出されておりましたので、ご紹介させていただきたいと思います。

ということで、本日は最後のワーキング、150年事業の基本方針について本当に忌憚のないご意見をいただいた上で、よりよきものにしていければということですので、基本的にはその議論で、限られた時間ではありますけれども、皆様方からご意見をいただきたいと思っておりますので、是非活発なご意見をいただければと思います。

ということをお願いいたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

それでは早速議事の方に入ってまいりたいと思います。予定されております議事、基本方針の原案について、それから今後の進め方を含めて、あわせてご報告をいただくということで、よろしくお願いたします。

## ● 岩崎北海道150年事業準備室長（事務局：北海道）

事務局の岩崎と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、【資料1-1】北海道150年事業の基本方針の原案をご覧ください。事務局では、8月9日から昨日31日までの約3週間、基本方針原案についての意見の募集を行いました。いただいたご意見やご意見の趣旨を反映したものが、お手元にある基本方針原案、9月1日現在修正版でございます。古い原案からの追記の箇所は、下線で表記しております。後ほど説明の中でご覧いただければと思います。

それでは、基本方針（原案）につきまして、ポイントのみ説明いたします。まずは資料の表紙の裏になりますけれども、「北海道150年」について触れております。1869年（明治2年）、旧暦の7月17日に、松浦武四郎が「蝦夷地」に代わる名称として、「北加伊道」を含む名称を政府に提案されております。北海道の名付け親であり、北海道に大きな足跡を残されました松浦武四郎を、北海道150年事業のキーパーソンとしております。

ページの下には、基本方針の作成趣旨を記載しております。

1ページになりますが、基本理念ですけれども、後段で、「新しい北海道を自分達の方でつくっていく気概をもつ」ことや、「北海道の新しい価値、誇るべき価値を国内外に発信する」ことなどを記載しております。

また、事業のテーマは、3つ掲げております。このテーマに沿った事業のキャッチフレーズにつつま

しては、前回もご議論いただきましたけれども、現段階では、北海道の新たなキャッチフレーズ「その先の、道へ。北海道 Hokkaido. Expanding Horizons.」を使用したいと考えております。このキャッチフレーズと年内に作成するロゴマークとうまく組み合わせながら、事業全体をPRしてまいりたいと考えております。

基本姿勢につきましては、「未来志向」の説明のところにもありますとおり、「世界の中の北海道」といった視点を持ちながら取り組むことが重要であるといったご意見、あるいは「価値創造」に関しましては、まずは、道民自らが北海道のことをよく知ることが大切であるといったご意見を、これまでいただいていたところでございます。また「道民一体」の説明のところになりますけれども、この事業の参加対象を道民に限定せず、「北海道を愛する多くの皆様」と位置づけまして、北海道を盛り上げていく旨を記載しているところでございます。

2ページになりますが、事業の概要についてまとめております。150年事業につきまして、実行委員会が行います「記念セレモニー」と、道民、団体、企業などの皆様が行います「北海道みらい事業」に大きく分けて整理をしております。下の図のローマ数字のⅠ及びⅡの部分になります。また、あわせて、ローマ数字Ⅳ及びⅤの部分になりますけれども、実行委員会が北海道みらい事業の実施のサポートを行うこととしております。この部分は後ほど7ページのところで触れたいと思います。なお、この節目を契機といたしまして、道や関係機関などが継続的に取り組むものについては、ローマ数字のⅢ、「関連推進施策」として検討を行っていくこととしております。

事業の実施期間は、原則、平成30年の1月から12月といたしまして、事業の展開エリアは、記載のとおりでございます。

3ページから6ページにかけては、各事業の実施の考え方等について記載しております。各事業のページには、囲みの部分がございます。各事業に関連する企画や取組の例を記載しております。これまでの会議でのご議論や、若い世代の皆様からいただいた作文の趣旨、そしてアンケート調査でいただいたご意見、これは【資料2】の方でまとめておりますが、こうしたご意見、アイデア等も踏まえまして、事業の例として記載をしているところがございます。

3ページは、「記念セレモニー」でございます。北海道150年事業を象徴するものとして、実行委員会が、セレモニーや関連する企画などを実施することとしております。個別事業としては、北海道の歴史や文化に関わる企画やイベントの構成要素といたしまして、アイヌの音楽や舞踏、お祭り、うたなどを挙げております。このほかに、北海道の未来をテーマとしたフォーラムの開催や、歴史から未来を学ぶといった視点でのシリーズもののシンポジウムであるとか、さらには、偉人などを選んで、その功績を讃える取組、市町村の宝物や価値を見つける北海道の一番星事業などを検討しているところがございます。

4ページ、5ページにつきましては、「北海道みらい事業」の記載となっております。この事業は、道民、関係団体、民間企業など様々な主体が実施するものでありまして、150年事業の中核となる部分でございます。道内の各地域や道外で、それぞれテーマをもって、企画、実施されることとなります。また、事業の登録についても記載しております。実施主体が事業計画の案を実行委員会に提出して、一定の要件を満たす事業について実行委員会が登録する仕組みを考えております。登録後、ロゴマークを使用できるように考えているところがございます。個別の事業といたしましては、北海道博物館における松浦武四郎に関連した展示事業や、道内の自治体と三重県松阪市との交流事業のほか、松浦武四郎さんに関する舞台化・映画化・ドラマ化などに向けても三重県などと連携して取組を行う予定でございます。また、北海道がもつ様々な資源に関わるデータベースの構築や、北海道の発展を支えてきた政策史の作

成、さらには地域のお祭りやおみこしの活用といったこともあわせて、「北海道」の見つめ直しに関わる取組を検討してまいります。そのほかに、アイヌのデザインを生かした情報や製品の発信に関わる取組や、5ページになりますが、食育や女性が活躍できる環境づくりなど一次産業に関連した取組のほか、北海道遺産プロジェクトの活性化につながる取組、あるいは文化庁が進めております日本遺産の登録に向けた取組や、さらには国際交流の取組などをお示ししているところでございます。

6ページには、道などが、この節目を契機として継続的に取り組む施策を記載しております。具体的には、「新北海道史」の後継史を編纂する事業や、道庁赤れんが庁舎のリニューアル事業などについて検討作業を進めているところでございます。また、約50年前に整備されました「北海道百年記念施設」につきましても、一部老朽化などもみられますことから、今後のあり方について現在検討を進めているところでございます。さらに、人材の育成のほか、2020年の東京オリンピック・パラリンピックが、北海道に大きな効果をもたらすような企画検討についても掲げております。この部分については、今後の検討となります。

7ページになりますが、「北海道みらい事業の支援」についてでございます。実施主体からの提案や相談を受けまして、実行委員会が事業の準備や実施についてサポートを行うことを考えております。図にあるとおり、実行委員会の中に個別事業を支援するチームを置きまして、サポートしていくこととしております。

8ページ、PRについてですけれども、これも実行委員会が担います。イメージコンテンツや様々な手法を用いまして、多くの道民の皆様方に、150年事業の取組を知っていただき共感が広がるよう展開してまいります。なお、平成29年10月から平成30年3月の半年間をPRの強化期間と位置づけて取り組んでまいります。PR業務につきましても、外部に委託することを予定しております。後ほど、現在の取組状況について説明したいと思います。

9ページになります。推進体制でございます。官民の幅広いメンバーからなります実行委員会を10月頃に立ち上げます。活動内容や体制の案については、記載のとおりでございます。

スケジュールでは、平成30年の1年間を通じて各種の事業が展開されることをお示ししております。

10～11ページには、道民検討会議の設置要綱を付けております。

以上が基本方針（原案）でございます。後ほど、ご審議のほどよろしくお願ひしたいと思います。

続きまして、次に、【資料1-2】をご覧ください。

この資料では、道民検討会議が行いました基本方針（原案）への意見募集の結果について取りまとめております。11名の個人、4つの団体から、計20件の意見の提出がございました。ご意見は資料の4に概要をまとめております。まず1ページですけれども、北海道みらい事業に関しまして、開拓期の歴史の発信として、ドラマ「新十津川物語」の再放送についてのご提案がありました。人材育成については、地域課題の解決といった視点が必要といったご意見もありました。ほかに、このページの一番下になりますけれども、松浦武四郎や島義勇をテーマとした舞台やドラマなどの制作についてのご意見もいただいております。2ページの一番上になりますけれども、将来を担う若者を北海道に招いてサマーセミナーを開催して、若いときから北海道のよき理解者になっていただくといった提案。中ほどになりますけれども、道民意見の集約、事業の具体化を図る上でより参加しやすく多くの人を巻き込む取組が大切であるといった事業の進め方についてのご意見。ほかに、「食・観光」の取組を重視すべき、あるいは、北海道150年文庫の編纂といった提案もございました。3ページになりますけれども、上段ですが、記念セレモニーの企画に関しまして、シンポジウムについては、「歴史から未来を学ぶ」とのコンセプトで、シリーズ形式で開催してはどうかといったご意見。歴史への理解を深めた上で、北海道みらい事業

と関連推進施策への流れをつくるのがよいといった提案です。同じ枠の後ろの方で、キーパーソンとして取り上げております松浦武四郎についての評価や、アイヌ文化の進め方に係る考え方についても意見が述べられてございます。下段になりますけれども、北海道の「牧畜・酪農文化」に関しまして、歴史、食文化、景観のそれぞれの視点から、産業や生活を振り返るといった事業の提案です。4ページの上段になりますけれども、2018年から東京オリンピックが開催される2020年までの間の3か年を北海道みらい事業の実施期間に位置づけてはどうかといった提案です。この期間中の2019年のラグビーワールドカップの札幌予選も、北海道をアピールする絶好の機会になると述べられております。ご意見の最後になりますけれども、まつりとみこしには、人と人をつなぐ力があり、先人の不屈の努力に思いをはせる機会となるとの意見をいただいております。こうした考え方をもとに、2018年に大みこし渡御と大花火大会を行って、アイヌの人たちとともに150年をお祝いしたいとの提案です。

以上、いただいたご意見につきましては、事業のアイディアに関するものが多かった状況でございます。現時点で取組が見られるものや、意見の趣旨が反映できるものにつきましては、今回、下線をひいたところですが、追記をしているところがございます。なお、今回反映できなかったご意見についても、道庁内の関係部署、関係機関、実行委員会などで今後検討を行うこととしております。

続きまして、【資料2】をご覧ください。

アンケート調査の実施状況について取りまとめております。8月31日現在で、108人の方からご意見をいただいております。このアンケート結果につきましては、一旦、本日の時点で整理をしたいと考えておりますけれども、皆様から気軽にご意見、アイディアをいただく手法として、このアンケート調査につきましては、引き続き、実施してまいりたいと考えております。

この議題の最後になりますけれども、【資料3】をご覧ください。

「今後の進め方」について、図でお示ししております。左側に、第3回みらいワーキングの囲みがございますが、本日の会議で皆様からいただいたご意見などを踏まえまして、作業を進めて、今後は基本方針の案を作成してまいりたいと考えております。

説明は以上でございます。

#### ● 小磯座長（北海道大学公共政策大学院）

どうもありがとうございました。ただ今ご説明いただきました150年事業の基本方針、これの原案、それから、今回いただいた道民からの意見、アンケート結果、今後の進め方ということで一括して事務局の方からご報告いただきました。

特に、150年事業の基本方針は、今日が最後の機会ですので、改めてこれまでの経過も振り返りながら、皆様方からこれについてのご意見を順次いただければと思います。

これまでどおり、まず順番にそれぞれご意見をいただいて、その後、フリーな自由な意見交換という形で進めていきたいと思っておりますので、いつも恐縮ですが、大津先生の方からよろしく願いいたします。

#### ● 大津委員（小樽商科大学）

大津でございます。長くなると時間ももたないなので、手短に、ここまでの感想といたしますかコメントを申し上げたいと思います。

この基本方針の原案について、今ご説明いただいたわけですが、これまでの議論をかなり盛り込んでいただきまして、なかなか「バーチャル道民」みたいな文言というのは最後まで残らないのではないかなと思っていたのですが、しっかり載せていただいたなと感じましたし、つい先だっけの報道を受けて、

様々な意見が寄せられていると、これをギリギリまで盛り込もうということで、事務局のご努力に敬意を表したいと思います。

私が申し上げたかったのは、全体としては、これが足りないとか、これをもっとこうすべきだと、そういうことではなくて、今申し上げたように、たまたま報道があったということではないのですが、やはりPRというのは重要なのだなとつくづく感じております。というのは、どうしてもこういったアンケート調査をして、そこに寄せられる意見というのは、大変強い思いに基づくものが寄せられますので、それぞれ参考にすべき内容で、しっかり受け止めていくべきだと思いますが、やはりごく一部の方であることは間違いなくて、残念ながら大半の方はまだ知らないし、知らないからこそ関心もあまりないし、問題意識もないということですので、もうちょっと端的に言うと、このアンケートにあまり強く拘りすぎない、あくまでこの事業のアウトリーチというか、事業を行っていくのだという気運を盛り上げていくひとつのツールであって、やはりPR事業というのが重要なだということを感じております。

そういう観点で今お聞きしていたのですが、例えば、PR事業の8ページでしょうか、キャッチフレーズとロゴマーク、それからPR手法ということで、現段階では網羅的に書かざるを得ないのかなと思いますけれども、吉田委員がご専門かなと思います、ここは相当戦略的に、かつ早い段階から手を打っていく、そういうものが必要で、ここにどう書き込んでいくのかというのは、今日のご議論を踏まえて可能な範囲でということだと思いますが、「事業PRを効果的に行い」という一言よりも少し強く、「危機感」とはちょっと違うかもしれませんが、より大胆な表現が出るとよいのかなと。かつ可能な限り具体的なPR戦略が出てくるとよいのかなと思います。

今日、冒頭に小磯座長からご紹介いただいた高校生の作文、私も審査の部分で担当させていただいて、本当に高校生がこれほどの意識を持っているのかと感銘を受けた、これもまた事実なのですが、さっきと同じことになりますが、理想は、全ての高校生、全ての道内の若者がこういったビジョンを持ってほしい。現状ではなかなかそうではないだろうと考えますと、同じく、若い世代へこの事業の浸透を図っていくための仕掛け作りということが一層大事なのだなと感じております。

その他、細かいところも、ちょこちょこ感想はございますが、全体まずは一言ずつということで、そこが一番気になったということでございます。

## ● 太田様（北海道バスケットボールクラブ）※折茂委員代理

折茂の代理のレバンガ北海道の太田と申します。

まず、みらい日誌について、受賞された方々の作品の質の高さというか意識の高さというものに、北海道の若者もまだまだ捨てたものではないなと痛感しまして、折茂も真剣にコメントしなければいけないくらいの内容だなというふうに感じておりました。

それから、大津委員とも若干重複する部分があるのですが、私は、日常は広報業務を担当しております、チームのPRというところをメインにやっているのですが、インターネット等の拡散の速さを痛感しておりますので、今、Facebookのページも拝見はしているのですが、正直、関わりがあるから「いいね！」とさせていただいているというのが本音のところだと思いますので、もっともっとそれを拡散して、今お話があったとおり、北海道の人達が150年はこういう事業をやるんだということを大半の人に知ってもらえるくらい、それこそ高橋知事がどんどん発信していくとか、そういうことをもっともっとやっていく必要があるのではないかなと思います。

それから、スポーツチームということで、お手伝いできることというのは、今、時期として10月くらいからという話がありましたが、我々はそういう時期、まさにオンシーズンですので、その試合会場の

中でPRブースを設けたりとか、配布物を、もっともっと来場する方々に、我々の試合を観戦する方々は、バスケの試合を観に来る方がほとんどですが、だからこそ、今の事業に関して広げてくれる可能性というか、初めて知る方が多いと思いますので、そういったお手伝いというのは、それほど手をかけなくても容易にできるのかなと感じます。

つたない意見でございますが、以上でございます。

### ● 河崎委員（作家）

河崎です。

今まで2回、会議の方に出ささせていただきまして、若い方たちが書かれたみらい日誌の方も拝読させていただいて、評価の方などもさせていただいたのですけれども、3人代表を出すという前提で読ませていただいたので、そういった結果が出ているのですけれども、それに選ばれなかった皆さんも、それぞれに北海道の未来に関して、現状に対して、若い方たちがものすごく真剣にそれぞれの思いをぶつけているという印象を受けて、これはすごいことだなと、個人的にすごく感銘を受けたのですけれども、それと並行しまして、今回の150年記念事業が、先日も某新聞に「関心いまいち」と書かれてしまっていたようで、実際に自分のまわりの人に聞いてみても「ああ、そうらしいね」みたいな認識でしか今はないのですけれども、まだあと2年あるというのが前提であるのと、皆さんに思い出してほしいのが、北海道民の気質として、何となく周りが盛り上がり始めると自分も乗るみたいなどころがあるように個人的に思うのですが、例えば、日本ハム（ファイターズ）がもうすぐ優勝だとなったら、普段プロ野球を観ていない人でも盛り上がってきたり、コンサドーレがJ1に上がりそうだとすると、何かみんなもの凄く盛り上がったり、リオ・オリンピックにそんなに関心ないやと思っていても、日本人が頑張り始めたら「頑張れ」というふうに応援をしたりとか、そういった道産子らしい気質があるように個人的には思っております。要するに、今回、一般の方たちをどれだけ巻き込めるのかというのが、今後ひとつのテーマになっていくと思うのですけれども、そういった意味で、150年に何かイベントがある、何かとても刺激的なことがある、お祭りということではないのですけれども、何か盛り上がる年になりそうといった期待感を一般の方にどれだけ持っていただけるかというのが、今後2年間でどれだけできるのかというのがキーポイントになりそうな予感がしています。

それに関しては、先ほど仰っていましたがPRするか、そちらの方は門外漢なので専門の方もいらっしゃることでしょうし、これから外注のご予定もあるということで、いろいろあるかと思うのですが、先ほど申しあげました若い方たちが、実は北海道のことに関してとても関心を持っている。それ以外にも、先ほどアンケートの結果の方を見させていただきましたが、具体的な記念セレモニーをベースにした市民カレッジというような勉強の場を設けてほしいと思うですとか、特定の産業についての勉強の場をととか、そういった意見がいろいろと出てくるというわけで、一般の方がそれぞれの物事に対する知識欲ですとかお祭りに参加したいですとか、そういった意欲というのは、悲観するほどではないと個人的には思いますので、PRですとか、又は委員の皆様それぞれの発信ですとか、そういったことが今後前向きに、あと2年間、いかにしてできるのかが軸になっていくのかなという印象でした。以上です。

### ● 津山委員（木古内公益振興社）

津山です。よろしくお願いたします。

先ほど、せっかくご紹介いただいたので、(Tシャツを) 今日着てこようかと想ったのですが、着替え



る時間がなくて。私は道の駅で働いているのですが、今、これが実際にお客様のお土産を入れる紙袋なのですけれども、北海道（の地図）が入っているで、「北海道のお土産ってすぐわかるよね」と好評だったので、ちょっと調子に乗ってですね、（Tシャツの）ここに「2018年H o k k a i d o 150年」というマークを入れて、Tシャツと紙袋はまだちょっとできていないのですけれども、作って、木古内から発信していきたいなと思い作らせていただきました。

今回、私がこういう委員というものにご指名いただいたのが初めてで、大変光栄なことだったのですけれども、私はもちろん、木古内町でこういうお声がけをいただいたのがほぼ初めてというくらいだったのですね。やはり、北海道って広いので、そういう声がかかったことがない地域っていうのはたくさんあると思うのですけれども、こういうふうにお声がけいただければ、私が作るというか、町の偉い方々が作っちゃおうと盛り上がってくれたので、マチ全体としてそういうふう気運が高まるマチというのはもっともっとたくさんあると思うのですね。どちらかという北海道の人たちって恥ずかしがり屋さんが多いというか、私は青函連携ということで青森の女性の方たちと活動することも多いのですけれども、どうしても青森の人たちが「我先に、我先に」と行くところに、北海道チームのメンバーが恥ずかしそうに付いていくという場面が結構多いのですが、でも北海道の人たちも火を着ければ「どんどん頑張っってやっていこうね」という気運が高まるのが逆に速いのではないかなと思うので、今回、原案を見させていただいても、一般の道民の方々が参加できそうなイベントや事業を盛り込んでいただいているので、是非実行して、1人でも多くの方々に参加していただけるように、私はPRっていうよりも、どちらかという行動を闇雲にしてしまう方なので、PRしていただくところに、私は体を動かして参加していきたいなと思っておりますので、今後150年事業もそうですし、この先の北海道の未来がとても明るく輝くものになっていけるように、私も頑張っっていきたいなと思っております。以上でございます。

## ● 林委員（北海道ガーデン街道協議会）

みなさんこんにちは。林克彦です。

第2回、ちょっと出席できておらず、先生のお話もありましたが、是非参加したかったなど。感動したということで、非常に素晴らしい会だったのかなと思うのですけれども、資料だけ拝見をさせていただいていると、第1回目に副知事も、どうしても予定調和になるんだよなという話をしていて、私も最近さらに未来志向になっていて、東京のIT系の方などとお付き合いをしていて、先週も十勝に10人ほど遊びに来ていただいて、一緒にキャンプをしたりして、小さなパーティをしながら未来についてずっと語っていたのですね。やはり、150年、その先の200年と書いてあるので、この資料だけ見ると、やはりすごく近未来的なものだなと思うのですけれども、2030年問題とか、いろいろ人口の問題とか出ておりますけれども、2030年だったり、2040年だったり、（北海道）200年に向けてどうしていくべきかというのは、この場で論議するよりも、そういった先進的というか未来を見据えてくれるような人達に入ってもらおうというのも非常に重要なのかなと思いました。キャンプの中にいた方々は、Yahoo!の方だったり楽天の方だったり、そういった関係者もいましたので、北海道は協定とか結んでいると思いますので、そういった方々の意見も聞いておくと面白いのかなと。やはり、驚きや感動、夢とか、やはり未来に向けたものがあると思うのですよね。例えば、大樹町の宇宙構想も夢があって、すごく未来的ですし、そこにはホリエモンが絡んでいて、どうなるかまだちょっと分からないのですけれども、そこで注目されてくと。そういったものも、何かしら、すぐにやれという訳ではないのですけれども、そういった方々が集まって論議する場というのも、もしかしたらありなのかなという感じがしました。以上でございます。

## ● 山崎委員（男山）

山崎です。よろしくお願いします。

私も2回目を欠席してしまったのですけれども、資料は全部拝見させていただきました。基本方針も全て網羅されていて素晴らしいなと思ひまして。ただ、私の個人的な意見としては、河崎委員と同じく、150年というのにどれだけ多くの人を巻き込むことができるのかというのが、最も重要じゃないかなと思っております。

その中でも、2点、私の中でも拘りみたいなのがありまして、1つは、札幌が中心にならないように、できる限り地方に分散してほしいなということですね。アンケートも、私は旭川なのですけれども、道北は3名ということで1番少なく、あまり盛り上がっていないというのが正直なところなのですけれども、札幌が中心になってしまうのは仕方ない部分はあるのですけれども、少し広げていただけたらなと思ひます。

もう1つはですね、高校生の作文は私も読ませていただいたのですけれども、それ以下の中学生、小学生、こういったもう少し下の世代もそれなりに考える力はあると思うので、彼らに向けた何か150年という事業もあってもいいし、個人的には、そういったところにも是非力を入れてほしいなと思っております。よろしくお願いします。

## ● 吉田委員（桐光クリエイティブ）

まず、本当にお疲れ様でした。ありがとうございます。

北海道が150年を機にどう考えているのかということや、北海道がこれを機会にどうしたいのかというのは示された。これは十分に盛り込まれたのかなと思ひますが、皆さんご心配しているとおり、では、これが道民とどう繋がるのか。ひとつ、まだ間に合うのであれば、道民目線の書き方の部分、これが150年というのが、あなたにとって、こういうふう置き換えられますというのを、できるだけ細かく出していくというのが、ひとつはあるのだと思ひます。ここに「道民一人ひとりが新しい北海道を自分達の力で創っていく気概を持ち、北海道の新しい価値、誇るべき価値を共有し・・・」、そのとおりですよ。ただ、これが小学生には、高校生には、企業人には、高齢者にはどう置き換わるのかという「あなた目線」の書き方がないがために、非常に耳障りは良いけれども、スルリと通り抜けてしまうというものになってしまう恐れがある。大抵のものってこうなんです。でも、今回は道民みんなに考えていただきたいので、逆に言うと、道民とはどんな世代、世代別に分けてみる、ポジション別に分けてみる、カテゴリー別に分けてみる、できるだけ細かく分けてモデルを提示するということだと思ひます。例えば、小学生が150年と関わるためには、小学生にどんな広報をしなきゃいけないのか。高校生は、今回作文という形で示しましたよね。そうしたら、高校生にとって150年というのは自分の将来を考える最大のチャンスなわけですよ、例えば。では、高齢者にとって150年って何なんだろう。やっぱり自分達が残してきた実績、功績というものを何らかの形で発信できる機会なのかもしれない。というふうに、150年という今回のきっかけが、あらゆる道民にとって、どのように自分と関われるものなのかというモデル提示をいち早くすることが、さっきから皆さんご心配されている、自分とは関係ないよねって言っている人達を巻き込む最高の広報だと思ひます。そのためには、PRというカテゴリーになっていましてけれども、PRではないのではないかと思ひますよね。PRというのは手法なんです。ここは広報戦略であるべき。これから、プロポーザルが出て行くでしょう、北海道から。この北海道150年事業を、皆さんPRしてくださいと。広告代理店や私たちの会社が手を挙げます。その時に、漠然とした公

募だと勝手気ままな広報が来ます。そうではダメで、私達はこういう世代、できるだけ細かく分かれた「あなた」というのを設定して、こういう世代に対して、こういうことを、150年を機にもたらしたいと願っている、道民の皆さんにこう捉えてほしいと願っているんだ、という私達の広報方針が示された上で、これをやるためにはどんな手法がありますかというプロポーザルにしないと。そもそも何を伝えるべきなのかということプロポーザルにしちゃダメだと思うのですよね。そのやり方は多様ですよ、例えばSNSっていうけれども、80歳のおじいちゃんはまだ使いこなせないですよね。だったら、その世代には、私達はこういう戦略でこういうふうに伝えてほしいんですというものを、手法ではなく考え方を示さなければならない。となると、これから間に合うかどうか分からないですが、「V. PR」というカテゴリーは、次のページであって、ここには北海道150年というものを道民の皆さんと共有して、ここからスタートするための広報戦略というものが書かれなくてはいけないのではないかなと思います。これが書かれると、プロポーザルしたときに、私達のように、例えば広告代理店さんとか事業者は、それを見ながらなるほどねと、こういうことを伝えたいのであれば、僕たちはこういう手法を提案できるよというふうにやっていくので、ズレがなくなるのです、というのを今の段階で整理した方がいいのかなというのを切実に感じます。

それからもうひとつ。これは私のあくまで意見というか、モデルの提示のときに、この作文をこれからどう使うかというのは、ひとつ大きなキーワードかなと思います。例えばですが、あの作文ひとつひとつを、彼女たちを出演者にしてミニドキュメントストーリーを作れば、それを見るだけで、150年ってこんな機会なのかということがかなり共感されます。というふうに、そういうアイデアをもらうためにも、何を道民にもたらしたいのかということが、この方針にかなり明確に提示されると、うまくいくのではないかなと思います。さっきの津山さんのTシャツも、ひとつのモデル提示なわけです。なるほど、地方ってこういうふうに150年と関わればいいのかという、すごくわかりやすい事例ですよ。というようなことを、いかに早い段階で出せるか、というところにかかっているような気がします。以上です。

#### ● 平野総合政策部次長兼政策局長（北海道）※山谷委員代理

どうもありがとうございます。

今、皆様方からご意見をいただいたのですけれども、いかに多くの道民の方々に関わってもらえるか、そして、この事業をどう理解してもらえるか、ということが大変重要だと思っております。今、吉田委員の方からご意見もございましたけれども、やはり世代、世代のターゲットごとに、どういうふうに捉えて、それをどのように感じていただいて、この事業をそれぞれの世代で盛り上げていただくかというのは大変重要だと思います。どういうふうに盛り込めるかといったところもあるのですけれども、やはり世代ごとに、どのように訴えていくかということが大切だと思います。我々もその辺は、まだまだ十分議論できなかった部分もありますが、限られた時間になりますけれども、考えていきたいと思っておりますので、我々の考え方に対するご意見などもいただきたいなと思っております。

それと、逆にご意見をいただきたいと思うのは、前回、前々回の第1回もそうだったのですが、みらい事業をそれぞれの方々が行っていくときに、我々としても支援をしていきたいなと思っております。例えば、みらい事業の中で、イベント的な事業もあるのだけれども、北海道150年を機に、例えば起業化をしていくものや事業化をしていくものに対して支援をしていきたいと思っており、これから予算要求などをしていくことになるのですけれども、皆様方から少し具体的なご意見をいただければと思います。すいません、お願いが変わってしまいますが、よろしく申し上げます。

## ● 小磯座長（北海道大学公共政策大学院）

後半の部分は、事務局としてのご発言ですね。

一応、基本方針（原案）についてのご意見を皆さん方からひと当たりしまして、やはり、多くの皆さんは、この事業をどういう形で周知させ、幅広い道民、関係者にとって一緒に取り組んでいく気運を盛り上げていく、そのために、PRが大事だ、基本方針が大事だ、それに向けてのご意見というところ。そこは共通の部分だったのじゃないかなというふうに思います。

先ほどもご紹介がありましたけれども、今のところ関心がイマイチだというメディアでの発信があったということなのですが、考えてみれば、我々の議論が始まったのは6月で、やっとこれからスタートということで、そんなに急速に関心が高まるのも恐いわけで、ある意味で、発信というのはこれから頑張っていきましょうという前向きなメッセージとして、受け止めていけばいいのではないのかなと思います。問題は、その手法、方法というものを、少なくともこれまで議論し、いろいろな取組もあったわけですから、どこが欠けて、どこが良かったのかという、そのへんは方向性を集約していくことが大事なのではないかと思います。

皆さん方のご意見をお聞きしながら少し感じたのですが、改めて、今回のこれまでの取組の中での最大の成果のひとつというのは、やはり高校生を対象にした「北海道みらい日誌」という、あれだけの若者の前向きな将来に対する意欲と具体的なメッセージというのを我々も目にする事ができた。ただ、これをどう次に繋げていくのかというのは、実はなかなか難しい。あの作文をそのまま使うというの、なかなか事業には繋がっていかないので難しいところです。先ほどの吉田さんのようなご提案もあると思うのですが、私は、この間、特に2人の高校生が実際に会場に来て、作文の披露とその後感想ということで披露してくれたのですが、実を言うと、この「北海道みらい日誌」を書くというその状況までは、北海道のこともあまり知らなかったし、よくよく先のことを考える、北海道のことを考えるということもなかったという発言がありました。改めて考えてみると、いろいろな問題なり可能性を感じたと。「北海道みらい日誌」の意味というのは、実は、北海道のこと、将来のことを真剣に考える状況を作ったということ。そこで真剣に向き合うと、あれだけの若者の力というものが引き出せたということ。この部分が150年事業の中で非常に大事な部分だと思うのです。それをどういう形で生かしていくのか。そういうきっかけに「北海道みらい日誌」を経験として次に伝えていただきたいなど。作文を書くというのは、ある意味ではかなり強制力のあった厳しい状況ではあったと思うのですが、これを道民に置き換えたらどうでしょうか。あなた達にとって、自分達にとって、自分の企業にとって、北海道庁にとって、経済団体にとって、150年を振り返り、これから何ができるのか、もしそこで真剣な議論が交わされて、主体的な自分達の問題としてメッセージが出てくれば、それだけで大変大きなもの。残念ながら、ここまで本当に真剣に取り組んだのはあの高校生だけで、ほとんどの方は、その場に出てきて、そこで意見を言うだけで、自分が何をやるか、本当に考えることはなかった。ちょっと厳しい言い方かもしれませんが、自ら取り組むきっかけにしていけば、「北海道みらい日誌」でスタートしたというのは、大変面白い取組なのではないのかなと私自身は感じております。

それから、一番大事なものはこれもいろいろな方達、先ほど河崎さんも仰っていましたが、一般の人達をどこまで巻き込んでいけるのかという、これに尽きると思うのです。道庁だけではない、選ばれたこういうワーキングのメンバーだけではない、検討会議だけではない、そういう外の方達をどこまで巻き込んでいけるか、そこで今議論したPRという言葉が出てくるのですが、実はPRという言葉だけでそれを置き換えていいのだろうかという、先ほど吉田さんからの問題提起もありましたように、私

も公共政策大学院というところで、政策研究という分野に関わっているのですけれども、私はこの150年事業というのは、ある意味で、北海道庁としての、北海道としてのひとつの新しい政策への挑戦だと思っております。そういう政策の中で、一般の人をどう巻き込んで行くのか。それは、よくやるのは道民参加とか市民参加というのがありますが、私はパブリック・インvolvメントだと思っております。いかに多くの人たちを幅広く巻き込んでその政策に参加させていくか。パブリック・インvolvメントというのは、実は計画を作る、政策を作る、その時に日本では市民参加、パブリック・コメントみたいな言い方でやっているのですけれども、本来、政策というものを、本当に力強く、将来に安定的に繋がる政策にしていくためには、多くの人達を巻き込んで、一緒にその政策を作ったというそういうプロセスを作ることが一番大事なんですね。ところが、日本の場合は、パブリック・インvolvメント、市民参加というと、結局、声を出す方は一部の方。パブリック・インvolvメントと言っても数はそんなに多くない。それは言い換えると、いわゆるノイジー・マイノリティという、ただ声の大きな一部の人に向き合うという、それでは質の高い政策はなかなかできないわけで、サイレント・マジョリティという、思いは持っているけれどもなかなか声を上げることは少ない方達に、どう歩み寄っていきけるかというのがパブリック・インvolvメントの非常に大事なところで、是非、この150年事業というのはそういう思いで、ただ、時間もかかるし手間もかかると思うのですけれども、そういう意味では、やっぱり主体的に自分達でやるんだという思いを持った人達をどれだけたくさん作っていきけるか、そこにかかっているのではないかなというふうに思うのです。そういう意味ではですね、これまでの議論の中では、これは道庁だけの取組ではない、札幌だけではない、非常に多くの方が、より多くの地域でやってくれと申し上げたのですが、今日はちょっと逆のことを申し上げて申し訳ないのですが、担い手である北海道庁という組織、少なくとも北海道庁に関しては、全ての部署が、この問題に対してどういう取組をしていくのか真剣に考えていくような気運づくりというのがないといけません。例えば、北海道のいろいろな各部署の方がおられますよね。別に予算を使わなくても150年という事業の中で、自分達の所管している分野の中で何ができるのだろうか、そういう議論を全庁的に積み上げていくだけでも、北海道庁が持っている政策分野って非常に幅広いですから、それだけでも、ひとつの気運づくりになってくる。今回は経済団体も一緒に参加しておられる。その経済団体に参加しておられる企業、いろんな委員会とかあるわけですから、そこで是非、このワーキングも3回やりましたから、それぞれ3回くらいしっかり議論をやってもらえれば、そこでどんなことができるのか、そういう具体的なできるところからの積み上げによって気運を盛り上げていくという、それが方法論としてのPRと同時に、そういう取組も大事なのではないかと感じておりますので、少し申し上げました。

ということで、これ以降は少し自由な意見交換を。他の方の意見に触発されてこれだけは言っておきたいでも結構なのですから、あとは自由にご発言いただければと思います。如何でしょうか。

### ● 大津委員（小樽商科大学）

本当に自由に少し。オリンピックもあって、皆さんもたくさん、先ほど河崎さんからあって、何だかんだ言ってあれだけのコンテンツですから、皆さん夜更かししてご覧になったことと思いますので、そこから触発されたことを少し申し上げたいと思います。

少し変な質問かもしれませんが、今回150年を目指しているわけですから、140年の時は何かやったのでしょうか。あるいは、それは既に話題になったのでしょうか。

### ● 平野総合政策部次長兼政策局長（北海道）※山谷委員代理

何もやっていません。

### ● 大津委員（小樽商科大学）

10年刻みというのはわかりやすく、何かやっていたのかなと思って今お聞きしたのですけれども、何が言いたいかという、先ほど林委員からもありましたが、ちょうど、イラストというか図の説明としては、100年、150年、200年と。このワーキングの席でも、50年が一時代で、50年前の経済状況、北海道の状況っていろいろな面で、生活も経済もあらゆる面で違っただろうと話題が出ていたように思います。50年ってちょっと長いなと。もちろん10年先のことも想像することはとても難しいですが、50年後どうなっているのかというのは想像もできないし、50年前のことを話せと言われても、私もまだ生まれていないので、最初にオリンピックの話を上上げたのは、オリンピックを見ていると、もちろんスポーツ特有の高揚感もありますけれども、そういえば自分が4年刻みで、前回自分は何していたのかなとか、中学生の時に、ちょうどロサンゼルス・オリンピックがあったのですが、そのことを思い出したりする。4年というのは、記憶ですとかと運動しやすい。うまくできているなと思いながら見ていたところ。また同じ事を別の事例で申し上げますが、かつて私は茨城県に住んでおりました、茨城県の北部の方に、金砂郷村、今は町でしょうか、そこに72年に1回のお祭りというのがあるのですね。72年に1回のお祭りって、資料もないし、何をどうやればいいのか、古文書みたいのを見ながらやるんですけども、大祭礼というのが大きな72周年だけれども、間に12年おきには小さいのをちょこちょこやりながら繋いでいるんですね。だから、記憶を接続していくという意味で言うと、50年刻みにどんと大きなことをやってみても、次、200年の時ってどうしようみたいなことに、またなるような気がしています。提案というところまで強い思いはないのですが、50年というスパンをとりあえず我々共有しながらこの事業に取り組んでいるつもりですが、何か、先ほど、道民全員が、もしくは北海道に何らかの縁のある全員が幅広く関わっていく、座長のお言葉で言うと、真のパブリック・インvolvメントということにしていくのであれば、やはり適切な記憶、語り継がれていたり、そういえば前回の時って自分がちょうど中学生でね、みたいなことが接続しやすいような何か、それは10年おきに絶対やってくださいと言っているわけではないのですけれども、何か仕掛けというものがこの際できるかいいなと思いながら、少し寝不足になりながらテレビを見ていたという感想のようなものでございます。他愛もない話で申し訳ありません。

### ● 平野総合政策部次長兼政策局長（北海道）※山谷委員代理

今の、大津委員の方からございました、50年毎ではなくてというお話もありますが、今、実は道議会の方で、「北海道の日」を制定しようというような動きがありまして、これから議会の議論になってくると思っております。いつできるか、いつからスタートするか、早ければ来年からスタートすることになると思うのですが、「北海道の日」と北海道150年はまだリンクはしておりませんが、北海道の日は北海道の日でどういうことをやっていこうかということも別途検討しておりますので、そういった取組と「北海道とはこれからどうしていったらいいのだろうか」とか「先人からの伝統、文化、産業面を引き継いで行くか」といったことを考える機会というのは継続的にできるきっかけになるのかなと思っておりますので、参考までにご紹介させていただきました。

### ● 河崎委員（作家）

ちょっと気になっていたのですけれども、今回の会議とは直接関係ないのかもしれないですが、札幌オリンピックの招致活動って、結果が出るのはいつでしたか。

● **平野総合政策部次長兼政策局長（北海道）※山谷委員代理**

結果は、まだです。JOCの方も正式に募集というか2026年度のオリンピックの募集もまだしていないという状況なのですよね。そういった面からすると、いつ決まるとか、いつ正式に立候補するというのは未定の状況です。

● **河崎委員（作家）**

と言いますのは、ちょっと気になっていたのは、今までの過去の松浦武四郎の時代から始まった北海道という名前の付いたこの島の歴史が、というようなことだとか、いろいろな方が苦勞して、というその先に、2回目の札幌オリンピックが数年後にありますよ、というのと、ありませんよというのでは、150年記念の雰囲気はかなり変わりそうかなと思ひまして。まだ分からないのですね。

● **小磯座長（北海道大学公共政策大学院）**

なかなかそこは見通せないということですが、そこは両方ありという前提で検討していくことが大事なのではないでしょうか。

● **太田様（北海道バスケットボールクラブ）※折茂委員代理**

先ほどの平野さんの話にちょっとリンクして、直接150年と関係ないかもしれませんが、道民の日、北海道の日というところにちなんで、実は我々、北海道外の試合に行くと、会場にいるファンの人達がある一定の時間になると県民歌を合唱するんですね。そこで、バっと士気を高めてオラのマチのチーム、オラの県のチームを応援するっていうのがあるのですが、結構多くのチームがそういうのをやっていると聞くのですけれども、北海道は道民の歌と違ってというのはないのですよね。

● **平野総合政策部次長兼政策局長（北海道）※山谷委員代理**

100年のときに作ったのですけれども、なかなか浸透しませんでした。ちょっとそれにリンクして、3ページに、この辺もご意見いただければとは思っていたのですけれども、関連企画例のところの3つめで、歌の制作、披露というのも盛り込ませていただいているところです。

● **太田様（北海道バスケットボールクラブ）※折茂委員代理**

そんなことで、広く道民のみんなから意見が吸い上げられるような仕組みづくりをして、道民歌をみんなで合唱できるような、他の県でできているのだから、北海道民にできない理由はないわけですよね。なので、その仕組みづくりだとか、気運の高め方なのかなというふうに思ったのですよね。そんなことを、先ほどの道民の日っていう話で思ひまして。

● **小磯座長（北海道大学公共政策大学院）**

せっかくなので、3ページのところは大事なところなので、お話をしておきたいと思うのですが、事業費というのがありましたね。広く道民から集める寄附、クラウドファンディングの活用、実行委員会構成員による負担金という、なかなかやはりこういう事業って、ここの部分をどう見極めていくのかは、

ワーキングの議論としては難しいかもしれませんが、私は、多分、一般の人達を巻き込むと同時に、大きな関心をこの150年事業として持ってもらうためには、事業そのものの新鮮さと言いますか、時代性と言いますか、今の時代らしい取組という、その部分がきっちりある程度特色を持って発信されていくということが大事なのではないかなと思っているのです。何を申し上げたいかと言うと、通常道庁の予算で、一般の実行委員会でやるというだけだと新鮮味がそう伝わっては来ない。そうすると、今の時代における新鮮さ、時代性は何かなと思うと、やはり行政の財政資金でやるという時代ではなくて、やはり今、日本の国もそうですし、世界の中で一番大きなお金って、やはり民間企業が持っている。そういう意味では、例えば、幅広い北海道に関心のある民間企業からしっかりと事業資金を得て、それで、ある意味で新しい時代の仕組みとして、この事業を展開していくというような、そういう仕組みを提案していけば、それだけでも関心を持たれる。そこで具体的な少しの事例なのですけれども、今、民間企業を活用してこんな政策の資金に充てる最大の議論が出ているのは企業版ふるさと納税ですね。ふるさと納税っていうのは、今、非常に個人版は返礼品で関心が高まっていますけれども、本来のふるさと納税っていうのは、その地域の政策、まちづくりであり、いろいろな事業、それに関心を持った、ふるさとに思いを持った方達がお金を寄附するということ。企業版の場合は返礼品がありませんから、本当に、政策、事業の質に関心を持つ企業からお金をもらう制度です。残念ながら、現在は企業版のふるさと納税はそんなに高まりは見せていないのですけれども、私の場合、地方の立場で政策研究なり、活動している立場からすると、民間企業の持っている力というのは非常に強いものがあって、今、例えば国のGDPと民間企業の売上げ、これをひとつの数字として合わせてみると、世界の100の国の中に、30から40の民間企業が入ってくるのではないかと。トヨタあたりだと世界でも40何番目くらいの力を持っている、アルゼンチンを上回るくらいの規模がある。そういう民間企業の力をしっかりこういう事業に取り込んでいくことが、大変重要です。そこに企業版ふるさと納税制度があるわけですから、それを活用していく。そういう形で実は150年事業を展開していくという取組をすれば、それだけでも関心を持つし、そこにハードルが高くても挑戦していく気概みたいなのところにその事業の意義みたいなのところを発信していけるのではないかなと。そうすると、発展して、私の個人的意見ということで申し上げますが、それを進めていく主体というの、例えば、従来型の実行委員会という形だけではなくて、そのためのNPOを立ち上げて、主体的な参加、担い手は道庁だけではなく幅広い人々の参加を、新しいスタイルで目指していく。今どうでしょうか、大津先生なんかご専門だと思うのですが、ヨーロッパなんかのいろいろな都市計画なんかやはり10ヶ年の、例えばドイツなんかだと時限の博覧会方式で進めている。ベルリンの都市開発なんかもそうですよね。従来型の手法にとらわれない新しい事業スタイルっていうのが今どんどん出てきているわけで、そんなことに挑戦していかれるっていう、そういう議論をしていくと、実は、一番今日の冒頭にあった、この取組への関心とか、そういう興味というのが増してくる。せつかくのワーキングの議論なので、自由な議論ができるということを前提にして私なりに感じているところを申し上げました。

もう1点、最後の意見を申し上げる機会なので、私自身の個人的な意見ということで、4ページ、個別事業ということでこれから進めていただく取組の中で、北海道の見つめ直しと継承ということで、北海道の発展を支えた政策史の形成という提案をして、ここに組み入れていただいて、大変ありがたいと思います。これの具体的な使い方ということを含めてちょっとお話をしたいと思うのですけれども、私は海外への経済協力ということで、いろいろな貧しい国などで地域の開発のお手伝いをしているのですけれども、その時に、北海道で活動しているというメッセージを出すと、やはり、以前にも少し申し上げましたけれども、たかだか1世紀ぐらいの時間の中でヨーロッパの中堅国並みの人口規模と経済規模



と、しかもこれだけの都市環境を備えた地域というものをつくり上げた北海道に対する非常に高い関心と、先進モデルとしての興味がある。例えば、これからのODA、経済協力のそういう場で、実は北海道ってこういう政策でこういう形で地域づくりができたのですよ、そういうようなメッセージが伝わるような冊子とか紹介する本とか、そういうものができれば、広い意味でいけば、北海道の観光戦略、インバウンド戦略にも通じる、少なくとも私のところに来られる海外からのお客様なり友人は、北海道の開拓の歴史だとか、そういうものを是非見たいということで、例えば、札幌周辺であれば篠津地域に泥炭地の開発資料館というのがあるのですけれども、あそこに行くと、実はこの北海道ですら世界銀行のODAの資金を受けて、それであの米作り、空知の米作地帯を一生懸命やってきたと。今の日本ですら、40年ぐらい前までは途上国と同じような経済協力資金を受けて、それがこういう札幌の街並みであり、それを支える農業生産地帯になったんだなという、実はこれが北海道が持っている素晴らしい魅力であり財産であると思うのですよね。そういうのを解りやすく、例えばアフリカとかアジアとか、そういう国々の方達に対してもメッセージとして伝わるようなそういう取組を是非していただきたいという、そういう思いで書いたものですから、以前に北海道の発展を支えた政策史の形成って何なのかなという質問も出たものですから、ちょっとこの機会にお話をさせていただきました。以上です。

### ● 林委員（北海道ガーデン街道協議会）

ひとつ質問をしたいのですけれども、たくさんやった方がいいかなと思うのですけれども、ひとつ、これが一番重要だというものがあれば、「二兎を追う者は一兎をも得ず」じゃないのですけれども、どれが重要なのかなというのが、記念セレモニーなのかどうなのかちょっと見えていない。卵と鶏の問題があるのですけれども、やはり何かひとつ焦点を絞ってそこをプロモーションするとかしないと、焦点がたくさんあり過ぎてぶれちゃっているのかなと思います。それから、4つめ（IV）の北海道みらい事業の支援ってあるのですけれども、今、帯広市では、帯広信金さん、北洋さん、道銀さんが合計2千万円を出して、野村総研にお金を払って、市も関わっていますけれども、そこで地域で活躍できそうな元気のある70~80人くらい集めて、そしてグループワークをするのですけれども、いろいろな日本の革新者と言われるベンチャーの社長だったり、例えば、スノーピークの社長だったり、いろいろな社長さんが定期的に来て、講演して、一緒に組みながらグループワーキングするのですよね。私も1回目、去年参加して、その時の社長さんが、「十勝はこんなにアウトドアがあるのに何でプロモーションしないの、連携しないの」ということで、それで私の方で、「それはそうだなと、もっとこれをやれば世界中にプロモーションできる」と思って、その時の社長さんと組んで企画書を作って、（国の）地方創生担当部局に持っていったらですね、面白いと、これはまさにDMOじゃないかということで、十勝型DMOを作ってほしい、というかやった方がいいということで、市長と一緒に去年の12月の地方創生フォーラムで石破大臣にプレゼンをさせていただいたところ、我が意を得たりと、これこそが重要だということになりました。自分がやったことがどうこうではなく、やり方が上手だったなど。野村総研も、これはいつもダメだと言ってるんですよ。「待ってます。支援はいつでもしてあげますよ。提案してください。」そんなのほとんど来ないんですよ。やはり、こちら側がキラリと光る人達を100人くらい、いろいろなところから選んでグループワークとかしないと生まれないと思うのですよね。それは、グーグルとかシリコンバレーの企業のほとんどの誕生を見ていると、大学の先生と卒業生と投資家と、いろいろな人が絡んでできているパターンが圧倒的なんですね。そういった意味で、この4番目のみらい事業は待ちの姿勢で、来たとしても無理矢理来させるパターンが多いのかなと、大体失敗するパターンだなというのはいつも野村総研さんが言っていますね。これはちょっと注意が必要かなと思いました。

### ● 吉田委員（桐光クリエイティブ）

今の林さんの話は非常に面白いなと思いました。

私も、この北海道みらい事業が実はひとつの肝じゃないかなと思っていて、今仰ったような、その芽をまず育てるとするのは素晴らしいなと思いました。その上でかもしれませんが、記念セレモニーをクラウドファンディングするよりも、やっぱり、こっちがクラウドファンディングであるべきではないかと思うのですよね。道はみらい事業としての場を提供してあげる、そのクラウド（ファンディング）ができる場を提供してあげることに、プロモーションと繋げるのだったら、北海道 150 年に、私だったら「私の」を付けたい。「私の北海道 150 年」というプロモーションをやれば、例えば、来年から 3 年間 CM を打てるとするならば、こういうところでやろうという思いを持った、これは選ぶ時には世代だとかジャンルだとか公平に選んでいかなければならないですが、さっきの高校生もそうですけれども、「私の北海道 150 年」ということで、夢と計画とやろうとすることがある人達を CM の主役で 150 本作って 3 年間展開するだとか、モデルの提示を急がなきゃいけないというのはつまりそういうことで、この 150 年というのは、そういうことを考えることができる機会であると、その機会に対してサポート、さっきのお話もそうですよね、考えられる力をサポートする。その考えた力を、お金を集める場を設ける、それを皆さんと共有して、なるほど、こういうことをするのが北海道 150 年なんだということをモデル提示してプロモーションする。広報と経営戦略というのは一体ですよね。そこを総合的に考えていかないと、無駄な経費が出ていたり、逆に言うと、後で蓋を開けてみたら結局はプロモーションが足りなかったなんてことにもなってしまいます。今のご心配はごもっともだと思うのですけれども、そういう仕掛けを全体設計した上で、この北海道みらい事業というのを目玉にしていくとすごくいいんじゃないのかなと思いました。結局、道民が主役に見えるプロモーションをしないといけませんよね。いくら、やろうよやろうよ、私達はこう考えているよと言っても、なかなか盛り上がらないので、ちょっと今のお話で、さらに良いことが計画できるかなと思いますので。

### ● 林委員（北海道ガーデン街道協議会）

言い忘れました。地方創生のアドバイスをいただきながら、来年の 4 月に向けて、十勝型 DMO ということで、アウトドア中心で新しい観光協会、よく DMO って観光協会って言われているのですけれども、ほとんど日本全国の DMO を立ち上げようとしている人は、温泉組合だったり観光協会がスライドするような形で作っているのですけれども、十勝型は民間ベースで立ち上げましょう。そして、中央の上場企業だったり世界的な企業と組んで、もしくは諸外国の領事館だったり、そういう方々と組んで、もっとこっちに来てもらおうという取組を今調査している最中です。そういった意味では、地方創生の方々も非常に、まだできているわけではないのですけれども、取組としては非常に面白いので、いろいろな県が相談しにくるのですよね、地方創生に。そうしたら、「どこが一番進んでいますか。モデルとしては面白いですか。」と聞くと、地方創生の方々は、「今聞くんだったら十勝に行った方がいいんじゃないの。」というアドバイスを、結構連絡が来たりするんですよね。そういった意味では、いい事例は、積極的にここでもマネするというか取り込んでいくということも非常に重要なかなと思います。

### ● 小磯座長（北海道大学公共政策大学院）

ありがとうございました。十勝の土地柄というか、前向きな精神で取組をどんどんやっている。そういうところを見習っていくことが必要です。

吉田さんが仰った、みらい事業ですね。元々やっぱり当初のこのワーキング、最初に議論したとき、なかなかみらい事業って主体的な立場ではなかったのですが、道民みんなで作る、そこをしっかりとやっていくことが大切でしょう。さっき平野さんから予算要求に向けて、支援のあり方についてご意見をいただきたいということで、こういうやり方がいいとか、ありましたらご意見をいただけたらと思いますが、如何でしょうか。津山さんどうですか。

### ● 津山委員（木古内公益振興社）

今、私達木古内町は、広域観光というものに取り組んでいて、木古内に新幹線が来たときに、木古内町だけの魅力で観光客にアピールするのは難しいということで、近隣の松前町であったり、江差町、奥尻町までの9町で広域観光をして、PRしていくということを掲げてずっとやってきました。私は木古内の生まれなのですが、東京でずっと働いていて、Uターンで戻ってきて、いきなり広域観光ということと言われて、いろいろな町に乗り込んでいったんですけども、やっぱり、いろいろ町ごとに事情があって、一言で広域観光と言ってもそんなにスムーズに、みんなで一緒に頑張ろうよというふうにはならないところもあったんですよ、正直。ただ、やっぱり新幹線が来るということで皆さん心をひとつに最後の方は頑張って広域観光というものに取り組めたんですけども、今後、北海道がこれから150年を迎えて、その後先に行ったときに、木古内町みたいな小さい町って、ひとつの町で頑張っていけるのかなと思うのです。そういう時に、近隣の町と協力できる体制が整っていることというのが今後の北海道にとってすごく大事なことなんじゃないかなと思ひまして、この150年を機に近隣の町と広域で、観光じゃなくてもいいのですけれども、広域連携できるような事業とか取組を応援していただければ、未来に向けて、近隣の町と助け合っていける体制ができたらいんじゃないかなと思ひました。

### ● 小磯座長（北海道大学公共政策大学院）

非常に大事な視点だと思います。新幹線が開通する前から、いろいろお伺いして。ただ、行政区域で分かれた地方が一緒になって取り組むというのはなかなか難しく、とにかく、新幹線が来るという、この開業というのは大きなインパクトで、それまで非常に難しかった横の連携もひとつひとつ積み重なっていくと。きっかけというのはすごく大事ですよ。今回の150年事業も、たぶん札幌だけではない、全道での展開というのが大きなテーマなのですが、札幌以外でどういう形で展開していくのか、今、どこまで詰めておられるのか。これは実はなかなか大変なテーマで、いくら総合振興局がやれと言っても、そんなに簡単に動くものではない。その時に、単体の自治体だけで取り組むことの難しさって、やはり最大の問題ですよ。そういう中で、広域的に地域の単位でこういう問題でどう取り組んでいくのか、そこは津山さんが仰ったような問題、この事業の展開の中でも直面していく、また解決していかなくてはならない大きなテーマだと思いますので、それも、実行委員会でも大きな課題のひとつでしょうね。

### ● 大津委員（小樽商科大学）

せっかく広域的な取組をとということだったので、ちょっとつまらないというか、技術的なコメントになるかもしれませんが、どうしても広域となると、振興局で何か考えましょうということになりがちでして、それがダメとは思わないのですが、どうしても枠組みありきになってしまう。私の大学がある小樽では、ご承知のように、例えば羊蹄山麓といった、ある地理的な構造上のご縁といった繋がりの中で、

価値を高めようとしているし、空知あたりですとワインの街道のようなものを構成して、つまり産業ですとか、もしくは歴史的な繋がりですとか、川の流域ですとか、楽しくない方のお話で言うと災害みたいなものに関連してとか、新幹線が来るからという繋がりとか、単位を柔軟に構成して取り組んでいるようなものがうまくいく。十勝は、十勝という切り方が非常にパンチがあるのでできていると思うのですが、何が言いたいかという、基礎自治体単位での事業者の中には、主体として自治体と書いてありますが、基礎自治体の場合によっては振興局を超えた何らかの連携した取組というのを促進というのか、インセンティブを出すのかわかりませんが、そこをメカニズムとして強く出すということはやってよいのかな、やるべきなのかなというふうに感じています。

それと、今更理念に戻ってしまうと、最後の回に何を言っているんだという感じもしますが、これは基本方針ですから、要はどういう方向で何を目指して進んでいくのかという方向が示されているわけですが、これに基づいて、様々な事業が展開されていく。その各事業に、最近ですと、これも技術的な話で恐縮なんですけれども、効果が検証できるような定量的な数値目標をつけなさいということ必ず言われるわけですね。そうすると、事務局の方は真面目なので、歌を作ったとか、Webサイトを公開した、そのアクセスが何PVあった、みたいなことに、どうしてもすごく計測しやすい目標に落とさざるを得ないことが多いと思うのです。今申し上げたかったのは、だからこそ、基本方針ですとか、基本の理念に基づく基本の目標というものがあって、この事業を通して、我々はどうなりたいのか、とか、どこまでいけばこの事業は、定性的でもいいので、達成されたというふうにみなせるのか、という何らかの目標といったものが、項目を立てる必要はないのかもしれませんが、もう少し表現されてもいいのかなと。そうでないと、どうしても各個別の事業の達成度みたいなものを積み上げて、4段階で2みたいなことになりやすい。大学も実はそういうことが多いのですが、そういう気がしまして、この段階で検討が可能かどうかかわかりませんが、何らかの方針だけ示してというか、方針の中に達成の目標みないものが具体的にもう少し書き込まれると、なお良いのかなと、改めて全体を見渡しながら感じたところです。連携事業の部分と目標の部分ということで、言い出すといろいろ言い始めて今更ということかもしれませんが、あくまで検討のお願いということでございます。

#### ● 小磯座長（北海道大学公共政策大学院）

今後、予算措置して、ひとつの事業として責任ある政策の推進ということになると、今ご指摘のあったようなこともきっちり固めていただけて進めていただく必要があると思います。

その他の議題についても説明があればお願いします。

#### ● 岩崎北海道150年事業準備室長（事務局：北海道）

【参考資料1】北海道みらい日誌の募集結果につきまして、改めて報告をさせていただきます。ご承知のとおり、最優秀賞を受賞された3作品については、作文の内容もさることながら、素晴らしい発表でございました。8月8日の道民検討会議の場におきまして表彰式を行っております。この資料の裏面では、作品や作者に対する各委員のコメントを紹介させていただいております。皆様には大変お忙しい中、審査等を行っていただきまして、事務局として心から感謝申し上げますところでございます。私ども事務局といたしましても、先ほどからお話が出ておりますとおり、受賞された3作品、その他の作品も含めて、素晴らしい作品群をどうやって活かしていくか、どう使っていくか検討を深めていきたいと考えているところでございます。

次に、【参考資料2】でございます。

PR業務の関係ですが、外部の専門性をもった方から支援を得ながらPRの業務を行ってまいりたいと考えております。公募型プロポーザル方式により民間事業者に関係業務を委託する準備を進めております。資料の2の目的にあるとおり、効果的なPR活動を行いまして、事業に対する認知度の向上、気運の醸成を図っていききたいと考えております。先ほど吉田委員から意見をいただいておりますが、既に事業者の公募を終えており、明日、応募者からプレゼンテーションをいただく予定となっております。

業務内容としては、3に掲げているとおりでございます。PRの内容、手法を提案していただくこととしておりますが、いただいたご意見、ご指摘も踏まえ、今後、事務局として留意して、可能な限り対応していききたいと考えております。

また、前回のワーキングでご意見をいただいた事項ですが、このPR業務の委託は道の予算で執行するわけですが、ロゴマークの選定に関しては、公募を行った上で、その後に選定の作業を予定しており、その過程で、みらいワーキングの皆様にも関わっていただけるような仕組みを作っていきたいと考えておりますので、方法が固まり次第お伝えしたいと思っております。この点、ご理解の程よろしく願いいたします。

#### ● 小磯座長（北海道大学公共政策大学院）

今のご報告についてはよろしいでしょうか。

全体、今回が最後ということで、これだけはというご発言があれば、あるいは今後に向けてのメッセージでも結構ですけれども。

#### ● 林委員（北海道ガーデン街道協議会）

3番の関連推進施策で、人材育成であるのですけれども、以前、経産局の競争力会議で確か小磯先生もその時同じだったと思うのですけれども、あの時は、私は人材育成は重要だとずっと言っていたのですけれども、人材育成ってものすごく難しくですね、来年、自分で会社を作ろうかなと思っているくらい重要だと思っているのです。大体、ここに予算が投下されると、大手企業、超大手企業にいちやうのですよね。やはりそれは情報を流しているだけで、人材が育成されていないのですよね。1週間くらいの研修、毎月1回とか、勉強会とかやったりすると、情報は流れるのですけれども責任持たなく成っちゃうのですよね。ですから、しっかりとやる施策は未来につながるようにしていただきたいというのは切に思っていますね。私は、人材育成会社をやるからといって、これを取ろうとは全然思わずですね、やはり地域の市町村レベルの人材育成会社作りたいたいなと思っていて、そこが、全国広しといえどもないのですよね。地方創生も人材育成といってたくさんお金が落ちているのですけれども、うちのグループにもやれないかとかですね。我々は超大手のところをお願いして来てもらって、はい100万とか、そんなものなのですよ。だけど、さっき言ったように、情報を流すだけなんですよね。人材は育成されていないのですよ。あつという間なんですよ、情報は流れてしまいますから。だから、自分の悩みを、まずは中央の方と解決できないかなということやるのですけれども、そういった無駄なお金が流れている部分があるなと思います。大学は大学で非常に素晴らしいことをやっていると思うのですけれども、どうしても大学も情報を流すパターンが多いので。そう言ったら怒られちゃいますけれどもね。そういった意味で、この無駄なお金が流れないように、無駄な時間が使われないように、本当にしっかりとそこまで考えてやっていただければなと思います。自分自身もやります。

#### ● 小磯座長（北海道大学公共政策大学院）

林さんは実践しておられてね。そういう意味では、いいモデルを見せていただいて、そういう取組を期待しております。

そうしたら、一応事務局の方にお返しいたします。

### ● 青山主幹（事務局：北海道）

小磯座長、ありがとうございました。委員の皆様も貴重なご意見ありがとうございました。

今後のスケジュール等を確認させていただきます。まず、基本方針についてでございますけれども、意見募集で提出された意見、本日、皆様から頂戴したご意見を踏まえて、基本方針の最終の案を事務局の検討案として整理していきたいと思っております。道といたしましては、今後、道議会の議論なども踏まえながら、次の道民検討会議が10月19日となっておりますので、ここに、その最終案を提示させていただいて、ご議論いただいた上で、基本方針を最終的に決定してまいりたいと思っております。

それから、このみらいワーキングにつきましては、一同に介してご議論いただくというのは、本日がこれで最後の機会ということになります。ただ、先ほど岩崎の方からも申し上げましたけれども、引き続き、この案を事務局で検討するに当たってアドバイスを頂戴するのはもちろんなのですが、今後、各ステージごとにそれぞれのお立場でご支援・ご協力をいただければと思っております。また、ロゴマークの選定、PR、広報戦略の方向性などについても適宜アドバイスを頂戴できればと思っております。

それから、本日は最後ということで、実は用務がありまして道商連さんは来ていただいているのですが、経済界に共同事務局をやっていただいておりますが、道経連さんから一言、最後に感想を含めていただいてもよろしいでしょうか。

### ● 水野総括部長（事務局：北海道経済連合会）

北海道経済連合会の水野でございます。いつもお世話になってございます。

今回、事務局の一員ということで参加させていただきました。まずは、小磯先生をはじめ、委員の皆様に大変しっかりとしたご議論をいただいて、たくさん宿題は頂戴いたしましたけれども、基本方針案ということで取りまとめをいただきましたことにお礼を申し上げたいと思います。

私は、道民検討会議2回とみらいワーキング3回、全て参加させていただきましたし、道庁さんとも事務局としていろいろな意見交換をさせていただきました。そういうことで、ちょっと感想的なことを申しますと、今、本日のご議論でも全て出ましたけれども、我々がやろうとしていることは、セレモニーが中心ということではなくて、みらい事業が中心なんだということですか、札幌だけでは意味がなくて、一部の人間だけでは意味がなくて、また道庁さんだけでは意味がないんだというようなこと。いろいろな過程で道民一人ひとりが150年を意識できるような仕掛けが重要なんだと、いうところが議論の肝だったかなと思いますけれども、その全てがこのワーキングでご発言、ご指導いただいた、そこでリードしていただいたのだと認識してございます。まだまだ不十分なのかもしれませんが、道庁さんをはじめ、事務局はそのへんをしっかり踏まえているということは、ご理解、ご確認いただければと思います。

また、今後につきまして、今先生からお話がありましたが、我々経済界としても150年を振り返る機会にしたいと思っております。先日、私どもの会長の高橋も道民検討会議の場において、北海道150年事業を盛り上げるような事業を、前年の29年度の事業計画にひとつ組み込みたいとお話しさせていただきました。一人ひとりが行動しなければならないということが、検討会議で確認されたというふうに思っております。我々も、今回事務局に参加させていただきましたけれども、お客さんじゃなくて

ですね、しっかり地に足のついた取組を何かしら考えていきたいなと考えています。

もう1点だけ。みらい日誌について、前回大津先生の方から、高校生の作文を見た中で、非常に危機感を感じたというご発言がありました。私も、50～60点読ませていただきましたけれども、同じような感想を持ちました。人口減少問題にどう対応するかというのが、経済界をはじめ、各界で取り組んでいかなければならない問題です。食と観光を中心に、産業界としても振興を図って危機突破していかなければならないと、改めて意を強くしたところであります。

また道経連としては、やはり夢のある事業にも取り組んでいきたいということで、先ほど林委員からもありましたけれども、大樹のロケット発射場の誘致ですとか、そういったことにもしっかり経済界として取り組んでいかなければならないというふうに思っております。

今日話をお伺いして、そういったひとつひとつがみらい事業なんじゃないかなと思っていたところでございます。それについても、きちっと対応していきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

### ● 青山主幹（事務局：北海道）

最後になりますけれども、平野政策局長から、お礼を申し上げたいと思います。

### ● 平野総合政策部次長兼政策局長（北海道）※山谷委員代理

委員の皆様方には、6月から本日までの間、北海道150年事業に関しまして、大変お忙しい中、熱い議論をいただき、本当に感謝を申し上げます。

第1回の会議でご提示させていただいた時には、実行委員会が行う記念セレモニー的なところをコア事業というような表現といたのですが、やはり、ここはそうではないのではないかと。やはり、全道、多くの道民を巻き込んでいくということで、みらい事業が中心だろうということで、2ページ目の図も、みらい事業、そして多くの道民方々が中心で行うといったことを、一番重要な点として置き換えを行い、この点は有り難いことだったなと思っております。

また、これから実行委員会を立ち上げていくのですけれども、小磯座長の方からもお話がありました。これまでの実行委員会と違うような、どこまでできるのかわかりませんが、やはり150年、これからの200年に向かっていける実行委員会ということで、どこか新しい取組といったものを取り入れていきたいなと思っておりますし、この方針ができてから、具体的に地域の取組ということで考えていて、やはり道庁の職員として、振興局ごとに考えていければなと思っていたのですが、そうではなくて、振興局の枠を超えた、それこそ全道の取組というようなことを考えていきたいなと思っております。

先日、三重県の松浦武四郎の出身地の松阪の市長さんがいらっしゃって、天塩川流域を訪問され、いわゆる上川の北部地域の市町村長さんと懇談をしながら、ひとつ天塩川をメインに地域の取組をやっていこうという有り難いお話をいただいたところであります。そういった取組をそれぞれの地域で立ち上げていきたいと思っております。皆さんそれぞれ地域からいらっしゃっていますので、ワーキングは今日が最後になりますけれども、引き続き、ご意見をいただきたいですし、またふるさと納税ですとか、企業に企画書を提案しながらお願いすることになるのですけれども、そういった際にも、個別にはなりますけれども、ご意見などいただきながら、これからもこの事業に深く関わっていただきたいと思っております。

小磯座長には、ワーキングの議論の取りまとめ、そしてワーキングと道民検討会議の橋渡し役ということで、本当に丁寧にご対応をいただきまして、改めて感謝を申し上げたいと思います。また、皆様方、

委員の方々に対しましてもお礼を申し上げたいと思います。この事業、多くの人を巻き込んで、札幌だけでなく、全道で、全体で盛り上がる事業展開をしていきたいと思っておりますので、これからも引き続きどうぞよろしく願いいたします。

感謝の言葉をもって終わらせていただきます。

● **青山主幹（事務局：北海道）**

本日の会議はこれで終了させていただきます。ありがとうございました。

(以 上)